

'22

編入学

小論文 1

(医学部医学科)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊（9頁）、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

イーディス・パールマン「非戦闘員」(古屋美登里 訳)を読んで、問1~5に日本語で答えなさい。

「戦争が終わっちゃったら、あたし、看護婦さんになれない」と、いちばん上の娘が不満そうに言った。

「どうして？」リチャードは訊いた。

「だって戦いがなくなっちゃうでしょ」と娘は言って、彼のベッド脇で眉根を寄せた。娘が子供用に書かれたフローレンス・ナイチンゲールの伝記を読んでいることをリチャードは思い出した。この子は不毛なクリミア半島の野戦テントを回って、勇敢なイギリス兵士の世話をすることを夢に見ているのだろう。

「平和な時代の看護婦さんになればいいさ」リチャードは言った。「パパが手術を受けたときに助けてくれた看護婦さんみたいなね」実を言えば彼女たち、赤い腕をした、哀れみを隠さない看護婦たちは、なんの助けにもならなかった。癌は転移していた。リチャードは四十九歳だった。

「あの病院の看護婦さん、ちっともかっこよくなかった」妥協を知らない八歳の娘が言った。

「戦争、終わっちゃう？」

「終わるね」ヨーロッパでの戦争はすでに終結していた。一九四五年七月の初めのいまは、アジアでの戦争も終息しつつある。ラジオのコメンテーターが嬉しそうにそう伝えていた。軍人たちはほっとした表情を浮かべている。リチャードの一家がこのケープコッドの小さな町にやってきたのは三日前のことだ。その日の午後、妻のキャサリンが食料品店でパンと牛乳を買うために車を降りたとき、若い帰還兵がふたり、戦場を離れた解放感からか中学生のようにはしゃいで彼女に口笛を吹いたのを、リチャードは車の窓から見ていた。

いまではもう兵士の飢餓感を共有することはできないが、理解はできた。木綿のワンピースを着たキャサリンは、実際とても可愛らしかった。眉間で歩哨に立っているかのような二本の皺が、優しい大きな茶色の瞳を引き立てている。クエーカー教徒として育てられた彼女は、子供のころに身につけた落ち着きを失っていない。彼女はリチャードより十五歳年下だった。

下のふたりの娘はキャサリンに生き写しだ。戦争が続くことを願っている上の娘はリチャードに似ている。三白眼で、透き通るような肌をしている。「軍隊の看護婦さんになれないなら、お医者さんになるもん。パパみたいな」と言った。

「それは素晴らしい夢だね」娘の顔は夏の陽射しですでに薔薇色に染まっているが、彼の顔は相変わらず砂のような色だった。

しかし、七月の二週目には顔色がよくなり始めた。闘病中につかの間の小康状態が訪れた

かのようにだった。ここに来てから鎮痛剤の量を減らせるようになっている。それで敏感になった。気分よく目覚めることはないが、午前十時にはいま住んでいる貸家の網戸を取りつけたポーチで、多少は楽に過ごせるようになった。ねじ曲がった低木の下で遊ぶ子供たちを眺めた。入院中に届いた手紙の返事を書いた。キャサリンが軽やかに話す声に耳を澄ました。彼女はポーチの彼のそばで洗濯物を分けたりじゃがいもの皮を剥いたりジグソーパズルの盤に屈み込んだりした。

午後になると、キャサリンは決まって子供たちと浜辺に行った。リチャードは妻と娘たちの姿が見えなくなるまで見送り、それから病室に変えられたリビングルームに戻った。ここにベッドが据えられたのは、バスルームが一階にしかないからだ。バスルームが近くなったとは言え、間に合わないときもあった。浜辺から戻ってくるキャサリンたちを彼はポーチで出迎えた。キャサリンが三歳の娘を抱きかかえていることもあった。彼女は上の娘に、裏に行って足をよく洗いなさいと言った。「あまり騒いじゃだめよ。ヘイゼルトンさんに迷惑がかかるから」

たいていヘイゼルトンさんは留守がちなので、迷惑をかけることはなかった。小屋の横に自転車が立てかけられていなければヘイゼルトンさんは留守だった。それは娘たちにもわかっている。母屋を貸し出したヘイゼルトンさんは裏の小屋に住んでいる。自転車がなくなると、娘たちは（両親に語ったことだが）ヘイゼルトンさんの小屋の窓から中を覗いて、そこにある物についていろいろ報告した（後には聞いてくれる人がいればだれにでも教えた）。初めて娘たちがそれを報告した日のことをリチャードはよく覚えている。子供たち——八歳と六歳の娘——は競い合うようにして言った。

「ちっちゃな、ちっちゃな流し台と——」

「ベッドがいつこ。ふわふわな、あれは毛布？」

「掛け布団ね」察しのいいキャサリンが言った。

「やかんがあった。金かな？」

「銅じゃないかしら」キャサリンが笑顔で言った。

「揺り椅子。たんす。蛇みたいな柄の敷物」

「……ああ、ブレイド模様ね」

「黒いストーブみたいなの。ずんぐりした」

「そこで子供を煮ちゃうんだぞ」リチャードがからかった。

「あのねえ、パパ」上の娘がそう言うと、二番目の娘が「あの人は魔女じゃないもん」と言った。しかし下の娘は泣き出した。でもその子はなんにつけよく泣いた。「ヘイゼルトンさんはいい魔女なんだよ」とリチャードは言った。

しかしリチャードとキャサリンが知る限り、ヘイゼルトンさんがひどく邪悪な魔女であってもおかしくなかった。ふたりが知っているのは、彼女がつい最近夫を亡くしたことと図書館で働いていることくらいだ。背は高くほっそりしている。リチャードと同年くらいに見える。白いものが交じった髪は、嵐の中を橋の上で立ちつくしていたような乱れ方をして

いる。軍の支給品のズボンと男物のシャツを喉元を開けて着ていた。

「たんすの上に絵があった」娘たちがリチャードに告げた。

「どんな絵？」彼は気だるげに尋ねた。

「ほら、パパ、人の顔がうつってるやつ」

「写真、かな」

「うん、そう」二番目の娘が言った。「男の人たち。帽子、被ってた。サイバーのついたの」しばらくして彼は「サイバーって？」と言った。

「バイザーのことでしょ」上の娘が説明した。

母屋を貸しているあいだヘイゼルトンさんが住んでいる小屋には、部屋と窓がひとつずつしかなかった。小屋は裏庭の北東に建っていて、母屋とのあいだにはトマトや豆、レタスが育つ家庭菜園が広がっていた。「わたしたちが家に戻った後に、ここにはキュウリができるし、しまいにはカボチャができるわ」キャサリンはそう言って、野菜がたくさん育つ未来を思い描いて顔をほころばせた。ヘイゼルトンさんは籠に入れた野菜を母屋の裏口の階段に置いていく。一度、彼女が四つん這いになって草むしりをしているのを見かけた。大きすぎる軍帽を被っていた。一家はときどき、彼女が朝出かけていく姿や夕方帰ってくる姿を目にする。しかしたいていは、下の娘が眠りに就き、ほかのふたりが本を抱えてベッドに入る夜の九時までに自転車が戻ってくることはない。ときどき夜遅く、リチャードが最後に飲む薬の時間になるのを待ちながらベッドで本を読んでいると、自転車のタイヤが固い土を擦っていく音が聞こえた。彼は本から目を上げ、別の音が聞こえてくるのを待った。やがて小屋の扉が閉まる音がした。

七月の三週目にはだいぶ気分がよくなって、夕食前に大通りまで歩いて往復するのがリチャードの日課になった。最初はふたりの娘に挟まれて歩いた。ある日、いちばん下の娘も、旧式の乳母車に乗せていっしょに歩いていった。その乳母車だと、子供は親と向かい合う形になれるし、親は愛らしい褐色の瞳とアラベスクのような唇を見つめていられた。それ以来彼は、妻にうりふたつの幼い子を必ず連れていった。

七月の終わりには、一日に二回散歩するようになった。一回目は夕食前に三人の娘とともに。そして二回目はひとりでサーチライトに照らされた空の下を歩いた。ひとりで歩いていった初めての夜、町の中にあるピンク色のアイスクリーム・パーラーに立ち寄った。仕事帰りの女性たちが小さな丸テーブルを囲んでいた。女性も子供も巨大なサンデーを食べていた。体の中の止むことがない痛みの火が、ぱっと燃え上がった。ハーレムのようなパーラーの雰囲気のせいだと思った。

その翌日の夜にはバーに入った。あまり飲める口ではなかったが、飲むとたちまち気分がよくなった。店の壁ははっきりしない色だった。暗がりのブース席には軍人や一般人も座っていた。ラジオが太平洋からのニュースを伝えていた。リチャードは隅に座り、一杯のビールを長い時間をかけて飲みながら、痛みの度合いを測った。痛みはひどくならず、慈

悲深くなれることを誇示しているかのようだった。大通りに出ると相変わらず人通りは多かったが、家のある通りは暗かった。途中、生育の悪い松の木の陰で小便をした。

キャサリンは、夫の息がビール臭いのがわかると笑った。「飲んべえね」

「お祝いをしたのさ」

「それはなにより！」 彼女は柔らかに歌うように言ったが、ふたりのあいだにはそれとは異なる思いが漂った。わたしたちに祝うようなことなどあるのだろうか。

訪問客があった。最近除隊したバニース・バスがやってきた（リチャードは軍隊が好きだった。あのままでいれば今頃は少佐になっていただろう。とはいえ軍隊は、適齢を過ぎた病気持ちの医師など求めていなかった。寛解していたとしても、身ごもった妻がいる医師に用はなかった）。

マッケチニー夫妻と四人の子供が、ガソリンの配給切符を惜しげもなく使ってプロビデンスからやってきた。配給はもうじき終わる、ということでみな意見が一致した。キャサリンはレンジの後ろの缶に使用済みの食用油を捨てずに取っておいたが、間もなくそんなことをしなくてもよくなるだろう。「戦争が終わったら私の闘いが始まるな」ポーチでリチャードはマックに言った。

「コバルトか」マックは即座に言った。

「ああ。コバルト治療をするつもりだ」 リチャードはため息をついた。試験薬の治験を受けるつもりだが、偽薬(プラセボ)のグループに入らなければいいが、と思った。

雨が降っていた。ふたりの妻は娘たちを連れてベティ・ハットンの映画を観に行った。マッケチニー家の男の子たちは静かにジグソーパズルと格闘していた。雨の猛襲を受けて木の枝が揺れ、葉擦れの音がした。遠雷が聞こえ、船の警笛が聞こえた。小径を通りに向かって音も立てずにペダルを漕ぐ人影があった。レインコートもレインハットも身につけていなかった。ずぶぬれの頭を高く上げ、嵐に向かってひたすら自転車を漕いでいた。少なくとも嵐にだけは愛されているとでもいうように。

バーテンダーは気さくな男だった。三、四人の常連客も礼儀正しかった。彼らの話は決まって、戦争はいつ終わるかというものだった。いったいおれたちはいつまで待たなくちゃならん？ あとどれほどの人が死ななきゃならんのだ？ 元気がない痩せた夫婦が中央のブースに陣取っていた。陽気な中年女性たちは店の奥のテーブルを占領していた。ひとりとは人工的にカールした黒い髪。別のひとは総身を赤で飾っていた。三人目は女の色香を発散していて、リタ・ヘイワースの伯母役でも演じられそうだった。ある晩、彼女たちが新顔を連れてきた。乱れた髪をし、男のような服を着ていた。リチャードはバーの反対側から会釈した。ヘイゼルトンさんが会釈を返した。

ふたりは次に会ったときも会釈を交わしたが、毎日交わしたわけではない。彼女がバーに来るときもあれば来ないときもあった。

リチャードの兄の一家が来た。ふたりの家族は仲が良かった。兄の子供たちは、叔父が重い病にかかっていることを理解できるほどの歳になっていた。思いがけないことが起きた。昼食のあとで、リチャードの二番目の娘が木から落ちたのだ。彼女はしばらく気を失っていた。リチャードの兄も医師だった。兄が丹念に調べて——リチャードとキャサリンは不安げに手を握りしめていた——怪我はしていないと言った。しかしだれもが狼狽えた。それから、夕食の前に冷蔵庫の下に水たまりができているのを見つけた。食品は傷んでいなかったが、庫内は温かくなっていた。キャサリンはヘイゼルトンさんの小屋の扉を叩いた。返事はなかった。それでふたりの妻が料理を作った。九人がポーチでサラダとホットドッグとトウモロコシを食べているとき（「バターはもともと溶かそうと思っていたのよね」と二番目の娘が言った）、ヘイゼルトンさんが自転車に乗って通っていった。「帰ってきた！」娘たちが競い合うようにポーチを飛び出した。

言うことをきかない召使いをうまくあしらうのが魔女の資格であるのなら、ヘイゼルトンさんは本物の魔女だった。リチャードはキッチン戸口から見ていた。キャサリンは食卓の椅子に座って見ていた。ヘイゼルトンさんが下にある扉を開けると冷蔵庫の内部が現れた。彼女はその前にしゃがみこみ、手を入れて何かを捻り、何かを引っ張った。たちまちブーンという音がして機械が動き出した。彼女はキャサリンに来るように合図した。ふたりはいっしょにしゃがんで冷蔵庫を調べた。なぜ説明をする相手にキャサリンを選んだのだろう、とリチャードは訝しく思った。ここでの指揮官はぼくではないのか？ ふたりの女性——優美な若いほうは水玉模様のワンピースを着て、角張った年配のほうは死んだ夫の服を着ている——は立ち上がると向かい合い、それからふたり揃ってリチャードを見た。一瞬ふたりが実際より大きく見えた。真面目な受容者とその無慈悲な姉である拒絶者に。すぐにもとの人間に戻った。愛らしいキャサリンと、ガスの炎のように青い目で彼を見つめる裏庭の未亡人に。

八月が始まった。痛みは弱まった。騙されはしなかったが、その小康状態を生かすことにした。ある晩ベビーシッターを雇い、妻とふたりで映画を観に行った。別の晩には外でふたりだけで食事をした。キャサリンの魅力に心乱された。彼女と暮らし、子供たちに恵まれ、いい職業に就けたとは、なんという幸運な人生だったのだろう——それでもなお、この素晴らしい人生を捨てても生き長らえたかった。洞窟に隠れても、裏通りを這い回っても、牛のように鋤をつけて働いてもいい。生き長らえるためならなんでもする。

八月六日、バーのラジオが広島のニュースをがなりたてていた。大勢の常連客が拍手喝采をした。みな酒を囲んで乾杯を繰り返した。ヘイゼルトンさんは仲間の女性たちから顔を背け、リチャードを見つめた。彼女の両手は膝の上に置かれていた。そこに紐で結びつけられてでもいるかのように。

八月九日に長崎が破壊されたニュースが流れた。ヘイゼルトンさんはバーにいなかった。リチャードはすぐに店を出た。家ではキャサリンがラジオのそばで編み物をしていた。彼女

は見開いた目をリチャードに向けた。「恐ろしいこと」と彼女は言った。

「戦争とはみな恐ろしいものだよ」彼はキャサリンの足許に座りこんだ。「この爆弾で戦争が終わり、多くの命が救われるかもしれない。そのためには仕方がないことだ」ふたりは、ラジオから流れる得意げな声に耳を傾けた。

それから数日のあいだに町は、日本からのニュースを尋ねあう民間人と兵士たちで溢れ返るようになった。長崎の爆撃の翌日、リチャードと娘たちは人でごった返す大通りの舗道を進んでいくことができなかった。くしゃくしゃの緑青色のサンドレスを着た見知らぬ女性が乳母車に屈み込んで、下の娘に感情のこもったキスをしたが、あつという間のことだったので娘は目を見張るばかりで泣くこともできなかった。

キャサリンが、浜辺はぎゅうぎゅうよ、と知らせてきた。八月十一日には、うるさくがなりたてる飛行船が海の上空をゆっくりと移動していき、うっとり見つめる子もいれば怖がる子もいた。飛行船はゆるゆると西へ向かって進んでいき、姿を消した。そのあいだに新しい屋台が現れた。綿菓子屋が大きな丸い金属製の桶から綿菓子をすくいとった。子供たちには初めて見るものだった。家に帰ってきた子供たちの頬には、鮮やかなピンク色の筋が網目のように付いていて、酔っぱらいの赤ら顔そっくりだった。

八月十三日、バーは満員で、空いているスツールがなかった。立ち飲みをするしかなかった。痛みは再び強くなっていた。痩せた年配の夫婦が見知らぬ人々といっしょにブース席に座っていた。バーテンダーはてんてこ舞いだった。バーテンダーの息子も手伝っていた。十代の痩せた少年で、彼がカウンターの向こうにいるのは法律に反することだった。

八月十四日の午後、リチャードは落ち着かない気分だった。家族が浜辺に出かけていったあと、大通りまで歩いた。バーは開いていて、中には常連客全員がいた。バーテンダーの親子が取りつけた黄褐色とピンク色の布テープが、天井の真ん中から垂れ下がっていた。捻られてたわまされた布の端が、壁の上部にピンで留められていた。祝いの飾り付けは下着のような色のせいで見るも無惨だった。

「赤と白と青のテープは売り切れだったんだよ」とバーテンダーが言った。何本かのテープが切れて、蠅取り紙のようにぶら下がっている。店内はますます混み合ってきた。七人から八人がひとつのブースに入っている。威勢のいい女性たちはすでに店の奥におさまり、男たち—ふたりの将校と海兵隊の制服を着た男—と知り合いになっていた。そのなかにヘイゼルトンさんの姿はなかった。

店の空気が息苦しかった。リチャードはグラスを持って入口に向かったが、引きも切らず出入りする人たちにぶつかり、とうとうグラスを持って通りに出た—これも法律に反する行為だ。水兵がおおびらに女性の胸を愛撫していた。仲間の三人がベンチに腰掛けて一本の酒瓶を飲みあっていた。水兵たちは、通りを挟んだ真向かいの公立図書館の正面で、この違反行為を堂々とおこなっていた。ウールワースの建物の—この町で唯一の三階建ての建物だ—三階の窓に大勢の人々が群がり、紙吹雪を投げていた。カードショップは騒々しい

陽気な客で溢れていた。煙草店、ドラッグストア……。

どこかで爆竹の音がした。すると次々に爆竹が弾ける音が聞こえてきた。そうするうちにもバーの喧噪は大きな唸り声となった。「勝利だ！」という声。「打ち破った！」という声。「降伏した！」。大きな笑い声が弾けた。教会の鐘が鳴りだした。町の西の外れにあるエピスコパル派の教会からも、東の外れにある会衆派の教会からも。自動車の警笛が騒がしく鳴っているが、道路を走る車は一台もない。通りに人が溢れているからだ。あらゆる体格の、あらゆる年代の、あらゆる服の色と髪の色をした人々がいた。歌を歌ったり、叫んだり、抱擁したり、泣きわめいたり、ひとりで、ふたりで、三人で、集団で踊ったりしている人々がいた。アコーディオンを弾いている人。トランペットを吹いている人。軍用トラックが一台、脇道から大通りに鼻を突き出してから、バックし、見えなくなった。次に兵士の一団が到着した。どんちゃん騒ぎを収めるためではなく、それに加わるためだった。なぜならとうとう戦争は終わり、だれもがその荣誉の一員だからだ。リチャードの目の前を、小さな男の子が泣きながらひとりで歩いてきた。するとたちまちだれかに抱き上げられた。おそらく母親だろう。警察は留置場の扉を開け放ったのか。さっき鳴ったサイレンはそのためだったのか。リチャードはバーの窓にもたれた。半分ほど入ったグラスをまだ手にしていた。彼はシャツのボタンを外し、残ったビールをシャツのなかに空けた。ビールが胃の上に広がる。緩いウェストバンドの下まで垂れたビールが下腹部を冷やした。内側の炎は消えはしないが、少しだけ、ほんの一瞬、和らいだ。彼はビールのグラスをゴミ容器に投げ入れた。

通りを隔てた向かいにある食料品店から怒号と歓声が聞こえてきた。理髪店からも、歯科医の診療所からも。図書館の通りを走ってくる人がいる。ベンチに座っている三人の水兵の前を通り過ぎた——そのベンチにはいまや二十人もが座っている。いや、三十人だ。その女性は通りを斜めに横切り、酔っぱらいたちに目を留めることなく、彼のほうに走ってくる。髪が船首の像のように後ろになびいていた。

彼女は笑ってはいなかった。泣いてもいなければ叫んでもいなかった。喜びに顔を輝かせてもいなかった。激怒していた。怒りがようやく解き放たれたのだ。リチャードは脇を走り過ぎようとする彼女を抱き止めた。彼女は喘ぎ、緊張し、拳を上げて撲(ぶ)とうとした。そのとき相手がリチャードだとわかり、苦しそうに呻いて彼の腕のなかに身を投じた。ふたりは、狂ったこの国で勝利を祝い勝利に酔っている無数の人々と同じように立っていた。リチャードは自分の死が、彼女の怒りで、その激しい抵抗で食い止められるような気がした。彼女があたかも凶暴な新薬、実証されていない、試験されていない新薬、最後のもっとも危険な賭けでもあるかのような気がした。彼女は身を反らせ、一瞬リチャードを見つめた。青く燃えるその炎が、彼の額を、鼻を、顎を、そして再び額を舐めるように動いた。いや、もしかしたら、ほかの場所を見ないようにするためにそうしたのかもしれない。たとえばびしょびしょになったズボンを見ないために。そこが濡れているのが彼女にはわかったはずだ。それから彼女は顔を忙しなく左右に振り、その激しい拒絶の動きで髪が揺れた。それで彼女を放した。彼女はバーの中に飛び込んでいった。リチャードは家に向かってとぼとぼと歩い

ていった。体は濡れそぼっていたが、心はくじかれていなかった。いまはまだ、くじかれてはいなかった。

(イーディス・パールマン『双眼鏡からの眺め』(古屋美登里 訳)、早川書房(2013)、所収)

問1 リチャードはキャサリンのことをどのようにみているのか。あなたがそう解釈した根拠についても、あわせて説明しなさい。

問2 リチャードはヘイゼルトンさんのことをどのようにみているか。あなたがそう解釈した根拠についても、あわせて説明しなさい。

問3 リチャードが「シャツのボタンを外し、残ったビールをシャツのなかに空けた」(下線部)のは、どうしてだと思われるか、述べなさい。その上で、あなたがそう解釈した根拠となる本文中の記述を(もしも複数あるならそれらをすべて)引き示しつつ、あなたの解釈を妥当と考える理由を述べなさい。

問4 末尾に「いまはまだ、くじかれてはいなかった。」という一文がある(二重下線部)。このときのリチャードの胸の内を想像して書きなさい。

問5 タイトルが「非戦闘員」となっていることについて、あなたが考えることを書きなさい。

(以下 余白)